

せっかち 園長の ひといごと

2017、2、28

認定こども園あかみ幼稚園・メイプルキッズ 統括園長 中山昌樹

3・4・5歳の話になりますが、今月はキッズフェスティバルが行われました。みなさんのご協力に、感謝申し上げます。キッズフェスティバルとは・・・0・1・2歳のお子さんのご家庭では、知らない方もいるかもしれないので、ちょっと説明すると・・・キッズフェスティバルとは、一年間の園生活のまとめとして、3・4・5歳の育ちに合ったやり方で、子どもたちが**表現**をする活動です。

表現とは・・・うれしいことや、時には悲しいことや悔しいこと、照れくさいことなど、子どもが**自分の気持ちを誰かに伝える**、ということ。そしてその伝え方は・・・言葉で、絵画や何か造形で、あるいは身体を動かすなどして伝えるわけで、そこにはその子どもの好きな、あるいは得意な**表現**方法が、無限にあると言えます。

表現というのは、いずれのやり方であっても、誰かに何か大切なことを伝えるということであるので、**表現はその人の一生を豊かで確かにしてくれるものなのです。**

そしてキッズフェスティバルでは、普通の保育でも同様ですが、3歳→4歳→5歳の、育ちの積み上げを大切にしています。（育ちの積み上げという意味では、0・1・2歳の育ちが土台となって、そこに3・4・5歳の育ちが積み上げられている、ということになります。）

私はこの、『育ちの積み上げ』が本当に大切だな、と感じます。その時その時に大切な育ちを、ひとつひとついねいに積み上げることで、本園5歳児・年長組の目標である「**合意の形成**」にたどり着くことができるからです。



3歳（好きな手遊びや歌）

⇒



4歳（好きなこと得意なこと→自己肯定感）

⇒



5歳（手作りの劇→合意の形成）

↓ 続く

合意の形成（5歳）とは、・・・3歳の育ち、4歳の育ちを積み重ね、自分のことを伝えられるようになり、相手（友だち）のことを受け入れられるようにもなった子どもたちは、例えば劇作りという活動にクラスみんなで取り組むことで、『合意の形成』を得ることになります。合意の形成とは、「自分も大切、相手も大切」という基本的な姿勢で、自分と相手（友だち）との間の考えの違いを解決する力です。自分が大切だと思うことをあきらめるのではなく、そして同時に相手の思いを否定するのでもない、お互いが納得する問題解決の仕方が『合意の形成』なのです。



高度ですよ、『合意の形成』って。でも大人社会含めて、多くの人間関係が勝つか負けるかという世の中では、人って幸せになれないのではないか、と私は思うのです。

もちろん子どもの育ち方は個性的で、何歳何か月だからこの育ちということはありません。ですが、0・1・2歳の育ちがベースになり、その土台の上に子どもたちが生きる力や表現する力を育てていくのは事実です。

くどいようですが、3歳→4歳→5歳 の育ちの積み上げは、植物がいい根っこを育てた上に、幹や枝や葉を育てていくようなものです。小さい組の保護者のみなさんはぜひ、5歳児・年長組の、子どもたちが大きな木になり森を作る姿を、楽しみにしてほしいと願います。

卒園の窯たきが終わりました

みなさんのおかげで、5歳児・もり組の卒園記念作り（自分を刻んだプレートを窯で焼く）が27日（月）に終了しました。お手伝いくださった「泥工房（でくのぼう）」のみなさん、ボランティアの保護者のみなさん、ご協力ありがとうございました。



この窯たきは5歳児・もり組になって初めて取り組める活動です。これについても、小さい組の保護者のみなさんはぜひ、お子さんがもり組になったら一緒に楽しんでくださいね。

子ども（チルドレン）・ファースト、ということ

最近よく、「〇〇・ファースト」って言いますね。「アメリカ・ファースト」はあまりいいイメージがありませんが、例えば「都民・ファースト」は、都民を一番に大切にするという小池知事の政策です。

これは政策ではありませんが、私が本園で大切にしたいのは、「子ども（チルドレン）・ファースト」（子ども第一主義）ということなのです。



だいぶ以前の話ですが（認定こども園になった後・・・今から7、8年前）、ある親御さんから「この園は、幼稚園寄りですね」と言われたことがあります。「この園は、幼稚園寄りですね」というのは、もの凄く単純に言えば、「働く親に冷たい」という意味なのでしょう。でも今思えば、園の名前が『認定こども園あかみ幼稚園』で、そこに「幼稚園」がついているからそう思ったのではないかと。

というのは、私は「幼稚園家庭 vs. 保育園家庭」・・・ものすごく単純に言えば、専業主婦の家庭と共働きの家庭を、対立させて考えたことはないからです。

そもそも法律的にも、認定こども園というのは、幼稚園でも保育園でもない施設。あえて言うならば、これからの世の中で求められる子どものための施設。すなわち『21世紀型の保育施設』だと言えます。

そこで求められているのは、親が専業主婦であっても共働きであっても、希望すればだれでも入れる（もちろん定員の枠内で）施設だと考えます。その意味で、認定こども園は「すべての子どものための施設」と言えるでしょう。

もしその地域で、「幼稚園家庭 vs. 保育園家庭」というように子育て家庭が分断されているとしたら、それは子どもたちにとって不幸なことではないでしょうか。子どもにしたら、別な言い方をすれば、教育を受ける子どもの側に立つと、親が専業主婦であっても共働きであっても、等しく質の高い教育が受けられる、というのが認定こども園の法律上の使命（ミッション）です。

子どもの教育にとって、親が専業主婦か共働きかは関係ありません。私はあえて言いたいです。私は「幼稚園家庭 vs. 保育園家庭」でものを考えません。私は「子ども（チルドレン）・ファースト」（子ども第一主義）を基本とし、その上で、専業主婦か共働きかに関係なく、親・保護者のみなさんと『子どもの育ちと一緒に喜び関係』をさらに築いていきたいです。

今回最後の話題・・・すべての子どもに求められる、これからの教育・・・日本の子どもの「読解力」は？

新聞記事を紹介しします。いずれも読書新聞です。以前からお伝えしている2020年の新大学入試、そして日本の子どもの「読解力」について、みなさんちょっと、考えてみませんか？

読解力が危ない SNS没頭 長文読まず

東京都立高校3年の女子生徒(18)は通学の電車内でスマートフォンをチェックするのが日課だ。朝までに届いたLINEのメッセージに返信する。「友達には『了解』も『り』で済ませ、それで通じるし、長い言葉は面倒くさい」。帰りの電車もスマホ。就寝前の午前1時から、友達とその日の出来事などを2時間ほど報告し合う。1日の利用時間は約4時間。女子生徒は

「スマホがなければ、もっずれも瞬時に短いメッセージを発信できる利点がある。たかも」と笑う。SNS(ソーシャル・ネットワーク)はスマホの普及に伴って若者らの間で急速に広まった。2008年に日本版のサービスが始まった「ツイッター」は原因の一つとして、スマホの普及に伴う長文を読む機会を減らした。一方、スマホの利用時間が増えた。11年に始まったLINEでは仲間内で対話型のコミュニケーションが可能だ。い查では、平日にスマホで2

時間以上ネットを利用する高校生の割合は前年度比3・5増の66・8%。5時間以上使った割合も1・1増。これに対し、全国学校図書館協議会(東京)によると、高校生の1か月の平均読書冊数は10年の1・9冊をピークに減少傾向が続き、16年は1・4冊となった。ネット依存の専門医療を提供する久里浜医療センター(神奈川県)にはスマホ

考える力を育む記述式問題に

大学入試改革

大学入試改革にやっ到着地点が見えてきた。国立大学協会が、国立大の2次試験で全受験生に長文の記述式問題を課す方針をまとめた。今の中学2年生が対象となる2020年度の実施を目指す。

20053000字程度の長文で答える記述式が想定される。国語を中心に、総合問題や小論文の出題も考えられる。統計資料や新聞記事を読み解いて考えをまとめるなど、新たなタイプの記述式になる見通しだ。小規模大学などを対象に、大学入試

センターが共通問題を作り、提供する仕組みも検討される。暗記中心の学習では身に付きにくい論理的思考力や表現力、読解力を養う効果が期待できよう。国立大が足並みをそろえた改革は、高校教育が変わる契機になる。考導要領の理念にも合致する。大学入試センター試験に代わり、20年度から実施される「大学入学希望者学力評価テスト(仮称、新テスト)」にも、記述式問題が導入される。国語で80字程度の短文記述式を導入し、数学でも、数式などの記述を新たに課す。マークシート式問題に、短文であっても記述式が加われば、理解度をより深く測れる。国公立大の9割が利用する大規模テストで課す意義は大きい。

文部科学省によると、国立大では理系を中心に、約6割の学生が国語、小論文などの記述式問題を課されずに入学している。「新入生の半数以上が、文章を書く基本的技能を身に付けていない」と感じる大学教員が4割に上るといふ調査結果もある。こうした現状は改善せねばならない。課題は、機械では処理できない記述式の採点の態勢整備だ。約50万人が受験する新テストの記述式問題については、一部を大学が採点する案も検討された。だが、入試日程が早い私立大などは対応が難しく、教育関連企業への委託に一本化される見込みだ。採点は一点刻みではなく、段階別評価で行われる。文科省は、採点基準を明確にするとともに、混乱やミスを招かないよう、業者との準備を入念に進めてほしい。文科省は来年度初めに、新テストの実施方針と問題例を示す。マークシート式問題の改善や、実践的英語力を測る外部試験の活用など詰め切れていない点もある。受験生や保護者の不安感を解消するためには、入試改革の意義も含めて、分かりやすく説明することが求められる。

< 2017. 1.29 >



友人とLINEでメッセージを送り合っている女子高生のスマホ。画面には短い文が並ぶ

純一郎・北海道大特任准教授46の実験では、スマホがそばに置かれているだけで、「メールが来ないか」などと気を取られ、注意力が低下することが確認された。また、脳科学者の川島隆太・東北大教授(57)がスマホを操作中の大学生約20人の脳の血流量を測定したところ、論理的な思考を行う大脳の前頭前野が「眠っているような、ボートした状態になっていた」という。川島教授は「脳が発達する18歳ぐらいまではスマホの使用を制限し、しっかりと文章を読む環境を作るべきだ」と訴えている。